

## 091 徐々に目が開かれる弟子たち

人々はしるしを欲しがる マルコによる福音書 8 : 11～13、マタイ 15 : 32～39

ファリサイ派の人々とヘロデのパン種 マルコによる福音書 8 : 14～21、マタイ 16 : 5～12

ベトサイダで盲人をいやす マルコによる福音書 8 : 22～26

▶人々はしるしを欲しがる マルコによる福音書 8 : 11～13、マタイ 15 : 32～39

11 ファリサイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを求め、議論をしかけた。

→ファリサイ派とサドカイ派はイエスを何度も試そうとした。

タイトル(書名)	章:節 聖句	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索対象総数 : 4 / 聖句等の総数 33250 (ファリサイ派とサドカイ派)4個] [検索語彙 : ファリサイ派とサドカイ派]
S マタイによる福音書	16:1	ファリサイ派とサドカイ派の人々が来て、イエスを試そうとして、天からのしるしを見せてほしいと願った。
S マタイによる福音書	16:6	イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」と言われた。
S マタイによる福音書	16:11	パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい。」
S マタイによる福音書	16:12	そのときようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことでなく、ファリサイ派とサドカイ派の人々の教えのことだと悟った。

12 イエスは、心の中で深く嘆いて言われた。

「**どうして、今の時代の者たちはしるしを欲しがらるのだろう。はっきりしておく。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。**」・・・イエスの憤り、義憤が感じられる・・・

13 そして、(折角、ユダヤ人の地に戻ったばかりなのに、イエスは) 彼らをそのままにして、また舟に乗って(東の異邦人のいる) 向こう岸へ行かれた。

▶ファリサイ派の人々とヘロデのパン種 マルコによる福音書 8 : 14～21

弟子たちはパンを持って来るのを忘れ、舟の中には一つのパンしか持ち合わせていなかった。

15 そのとき、イエスは、

「**ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい**」と戒められた。

→ファリサイ派のパン種：イエスはベルゼブルの力によって奇跡を行っている。

ヘロデのパン種：ヘロデ党は親ローマで、イエスはローマ支配に抵抗する反ローマである。

16 弟子たちは、これは自分たちがパンを持っていないからなのだ、と論じ合っていた。

17 イエスはそれに気づいて(畳み掛けるように、立て続けに) 言われた。

「**①なぜ、パンを持っていないことで議論するのか。②まだ、分からないのか。③悟らないのか。④心がかたくなになっているのか。⑤目があっても見えないのか。⑥耳があっても聞こえないのか。⑦覚えていないのか。**

19 **わたしが五千人に五つのパンを裂いたとき、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」**

弟子たちは、「**十二です**」と言った。

20 「**七つのパンを四千人に裂いたときには、集めたパンの屑でいっぱいになった籠は、幾つあったか。」**

「**七つです**」と言うと、イエスは、「**まだ悟らないのか**」と言われた。

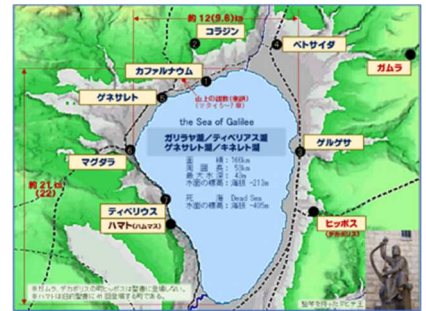
→イエスがどのようなお方であるかが弟子たちに見えていないことが問題である。

▶ベトサイダで盲人をいやす マルコによる福音書 8 : 22～26

22 一行は（異邦人の地）④ベトサイダ（Bethsaida=ベツサイザ・ユリアス）に着いた。人々が一人の盲人をイエスのところに連れて来て、触れていただきたいと願った。

23 イエスは盲人の手を取って、村の外に連れ出し、その目に唾をつけ、両手をその人の上に置いて、「何か見えるか」とお尋ねになった。

→唾の効能：味覚物質を溶かし出す、消毒、再石灰化、潤滑、緩衝、抗菌、粘膜保護、自浄作用、活性酸素抑制等



24 すると、盲人は見えるようになって、言った。「人が見えます。木のようにですが、歩いているのが分かります。」

25 そこで、イエスがもう一度両手をその目に当てられると、よく見えてきていやされ、何でもはっきり見えるようになった。



26 イエスは、「この村に入ってはいけない」と言って、その人を家に帰された。

【参考】パン種

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数 : 11 / 聖句等の総数 33250 (パン種)15個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙 : パン種]
S マタイによる福音書	13:33 また、別のたとえをお話しになった。「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」	
S マタイによる福音書	16:6 イエスは彼らに、「ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種によく注意しなさい」と言われた。	
S マタイによる福音書	16:11 パンについて言ったのではないことが、どうして分からないのか。ファリサイ派とサドカイ派の人々のパン種に注意しなさい。」	
S マタイによる福音書	16:12 そのときようやく、弟子たちは、イエスが注意を促されたのは、パン種のことではなく、ファリサイ派とサドカイ派の人々の教えのことだと悟った。	
S マルコによる福音書	8:15 そのとき、イエスは、「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい」と戒められた。	
S ルカによる福音書	12:1 とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である。」	
S ルカによる福音書	13:21 パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」	
S コリント信徒への手紙 I	5:6 あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。	
S コリント信徒への手紙 I	5:7 いつも新しい練り粉のままにいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。	
S コリント信徒への手紙 I	5:8 だから、古いパン種や悪意と邪悪のパン種を用いなくて、パン種の入っていない、純粋で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。	
S ガラテヤの信徒への手紙	5:9 わずかなパン種が練り粉全体を膨らませるのです。	

**【参考】 貧困者に支持者の多いファリサイ派 →ヘレニズム(=ギリシア風)文化に対して否定的**

ユダヤ教の教派で、イエスの時代に最も高く評価されていたのは、中間時代に誕生したファリサイ派で、この時代、民衆にとっては、ユダヤ教=ファリサイ派的ユダヤ教であった。

ファリサイ派はハスモン朝※1時代に形成され、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界を信じ、律法遵守を徹底し、特に安息日や断食(週2回、木曜日と金曜日)、施しを行うことや清めの儀式を強調した。

律法学者(モーセ五書<トーラー>—創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記—を研究する学者)の多くがファリサイ派に属し、聖書(旧約)の独自の研究と伝承による解釈を固執、主張した。聖職者である律法学者(ラビ rabbi)を信仰の仲介者とし、ユダヤ人会堂の多くを管理していた。ファリサイ派は、律法を研究、遵守して、どのように生きるべきかについて教えていたために、民衆に尊敬されていた。ファリサイ派の名称は、「パルーシーム(パルシム)」=「分離する者」あるいは「清い者」を意味するヘブライ語に由来するとされるが、正確には不明である。

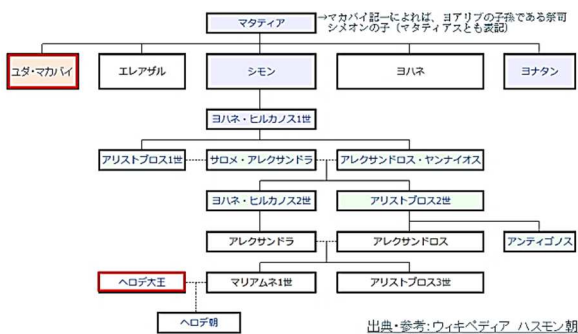
ユダヤ人指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ユダヤ人会堂から追放されるのを恐れ、このことを公言しなかったし、もし、それが発覚した場合は、ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した(ヨハネによる福音書9:22)。

イエスを訪問したニコデモは最高法院に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった(ヨハネによる福音書3:1)。

また、ファリサイ派の人々はイエスが自分たちの立場や影響力を脅かすと考え、イエスを殺そうと企んだ(マタイによる福音書26:1~5、マルコによる福音書14:1~2、ルカによる福音書22:1~6、ヨハネによる福音書11:45~57)。

エルサレム神殿の崩壊(AD70年)後はユダヤ教の主流派(神殿に拠っていたサドカイ派は消滅)となり、会堂に集まって聖書を読み、祈りを捧げるスタイルが、ユダヤ教のスタイルとなっていった。

※1: BC 140年頃からBC 37年までユダヤの独立を維持して統治したユダヤ人王朝。BC 166年に起きたユダ・マカバイによるセレウコス朝軍への決起から約20年後に成立。フラウィウス・ヨセフスによればハスモンという名は一族の先祖、祭司マタティアの祖父の名前に由来しているといわれている。



フラウィウス・ヨセフスは、帝政ローマ期の政治家及び著述家である。AD66年に勃発したユダヤ戦争でユダヤ軍の指揮官として戦ったがローマ軍に投降し、ティトゥスの幕僚としてエルサレム陥落にいたる一部始終を目撃、後にこの顛末を記した「ユダヤ戦記」や「ユダヤ古代誌」を著した。

ヨセフスは、青年時代にサドカイ派やエッセネ派などを経て、最終的にファリサイ派を選んでいる。

**【参考】 富裕層の支持が多いサドカイ派 →ヘレニズム(=ギリシア風)文化に対して柔軟**

中間時代に誕生したサドカイ派は、その名を祭司の主流派、ツアドク(ザドク)に由来し(サムエル記下20:25、列王記上1:38~44)、神殿詣(神殿信仰)に重点を置き、そこで犠牲を献げることを教えた。裕福な上流社会のユダヤ人(サムエル記下20:25、列王記上1:39~45)—祭司、教養のある金持ち、貴族階級に属する人々—でファリサイ派と対立した。彼らは、モーセ五書(トーラー)のみをファリサイ派のように多くのこじつけ議論等に陥ることなく非常にまじめに解釈した。ファリサイ派との違いは、サドカイ派は神が人々を死後によみがえらせることが律法に記されていないことから、天使、悪霊、魂の永遠性、死後の世界や復活を信じず、終末論の死後の世界に対する信仰もなかった。サドカイ派はファリサイ派と異なり、政治的には既得権益を守るために親ローマであったため、一般大衆の支持がなかったが、宗教と政治の面では力(神殿礼拝、神殿ビジネスの完全支配)があり、非常に影響力があった。